結びのことば

公式活動記録作成委員会委員長
副センター長　福地　成

結びのことば

みやぎ心のケアセンター　副センター長
公式活動記録作成委員会委員長
福地　成

はじめに、東日本大震災により犠牲となった御霊のご平安をお祈りいたします。また、地域の復興のため長年にわたり、昼夜を問わず献身する支援者のみなさまに深い敬意を表したいと思います。そして、次に感謝の気持ちを述べさせて頂きます。数えきれないほどたくさんのご支援に支えられ、みやぎ心のケアセンターは９年間活動を継続することができました。本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

当センターは2020年度をもって一つの区切りを迎えることになりました。宮城県は「2021年度以降、最長で５年間延長する」という方針を示し、当センターは終結に向けて舵を切り、段階的に規模を縮小していくことになりました。そのため、このタイミングで今までの活動を振り返り、本書「公式活動記録」をまとめることになりました。本書作成のプロジェクトは足掛け２年にわたり、当センター内に委員会を設置し、喧々諤々の議論を重ねてきました。そのなかで、「私たちスタッフの卒業アルバム的なものではなく、あくまでも後世に役立つ内容にする」という方針が確認されました。今後、大きな災害が日本で発生し、私たちと同じような取り組みをする人たちがいるかもしれません。そのときに、本書が少しでも支援活動の足がかりになることができればという視点から本書は構成されています。

まったく誰が「コケセン」なんて愛称をつけたのでしょう。「コケたりはせん（転んだりはしない）」とでもいう意味なのでしょうか。９年を経過した今では愛着を持って呼んでもらっていますが、開設当初は「本当に役に立つのか」という冷ややかな思いもあっての呼称だったと思います。阪神淡路大震災後の兵庫コケセン、新潟中越地震後の新潟コケセンがあったものの、ほぼ前例がない状態から活動を開始しました。「考えてから走る」ではなく、「考えながら走る」しかありませんでした。方向を間違えていても、誰にも修正してもらえない怖さもありました。ベタですが、振り返れば成功より失敗のほうが圧倒的に多かったと思います。そんな泥くさい試行錯誤の積み重ねの結果、いまの私たちの活動スタイルがあります。将来、私たちの活動が批判的に議論されるのか、もしくは日本国の災害支援スタンダードになるのか、10年、20年の時間が経過しないと結論は出ないでしょう。

保健師さんをはじめとする市町のみなさまにひとこと。私たちのクライアントは市町と考えて活動をしてきました。それぞれのやり方で、ひたすらに地域復興に取り組んでいる姿を間近で見てきました。そんなみなさまをしり目に、一足先に「店じまい」をはじめることはとても心苦しく感じます。それでも、当センター終結までの間、私たちも自分たちにできることに全身全霊で取り組み、みなさまに寄り添い続けることができればと思っています。

私たちはもうコケたりしません。私たちの試みや経験が教訓になり、今後起こりうる自然災害への備えになれば嬉しいです。

2020年10月末日